

ひとつの転機

駐在して一年近く経った九〇年の五月、外国の大使館や駐在員事務所に仕事や生活上のサービスを提供している外務省の附属機関ウポデカから、事務所をあてがわれることになり、それとほぼ時を同じくして、アパートも用意してもらうことが出来た。モスクワの西南、地下鉄の終点に当たるユーガザーパドナヤ駅の少し手前の、郊外に向かって左側の方にこんもりした森があって、アパートは、その森の北端の手前に立っている何棟かの建物の中の、森から少し離れた建物のひとつにあり、その建物の半分は、森に向いている南側がロシア人、土地が開けて見晴らしのきく北側が外国人の住居になっている。

十六階建の北側の十四階にある三DKのアパートに七月初旬に移り住んで、その時初めて、それまで生活していた長期滞在者用ホテルが単身の外国人にとっては住み心地の悪い所ではなかったということに気がついた。住居のあった建物にしる、はじめ事務所のあった別棟にしる、建物の出入口に人の出入りを管理している従業員がいつもいて、出入りの度に挨拶したり、何かと声をかけてくれる。彼らには老若男女を問わず総じて、日本の都会ではどうになってしまった他人に対する素朴な思いやりが感じられる。生活のペースがゆったりしていて、気持ちにそれだけ余裕があるためであろう。自然の成り行きで彼らと親しく会話を交わすようになった。

ところで、彼らは二十四時間仕事をした後二日休むという勤務の仕方で、通常二人ずつペアーを組んで働いていた。そうした勤務方式のためか、ほとんどがまだ若い三十前の家族持ちの女性で占められ、男性の場合は年金生活の老人でなければアルバイトの学生であった。夜も九時を回る頃には彼らも暇になるので、お茶でも飲みにくるようにと時々誘ってくれた。

よく声をかけてくれたのは、青い眼をした金髪で年はまだ二十五歳前の女性で、名前はナターシャということにしておこう。彼女は結婚して、子供を産んだ後太ってしまったために、美貌がやや損なわれたようであるが、娘の頃はすらりとして、なかなかの美人であったと想われた。椅子に腰かけて笑ったりほほえんだりした時の彼女の笑顔は魅力的で、小さなぽっちゃりした手は女性らしい優しさを感じさせた。

彼女とペアーを組んでいたのが、彼女より少し年上の女性で、名前をガーリヤと呼んでおこう。眼は褐色で髪の毛は黒く、目に力があって、芯は強そうな女性であったが、いつも笑顔で迎えてくれ、人が善かった。

ガーリヤには駐在した年の大晦日の夜、家に招待されて、ロシアの人たちと一緒に新年を迎えるという貴重な体験をさせてもらった。彼女のご主人はロシア人にしては、背はそう高くなく、中肉中背で、年の頃は三十歳ぐらいであったが、やはり人が善さそうなところが感じられた。紹介された時、彼の褐色のどんぐりまなこに一瞬好奇の色が浮かんだのを認めたが、それは彼の妻から私のことをいろいろ聞いていて、どんな男か想像を巡らしながら私に会うことを心待ちにしていたという風であった。初対面にありがちなぎこちなさをそれほど感じることもなく、互いにすぐ打ち解けることが出来た。私のほかに近所に住む彼らの友達で、強度の近視が手術によりメガネの矯正なしで正常に見えるようになったという三十歳前の男性客が一人いて、暫くみんなでお茶を飲みながら話し込んだ。新年

のために大事に貯めておいたお酒を戸棚の奥からいろいろ出してきて、午前零時近くなるのを待って、彼女のご主人がシャンパンで乾杯の音頭を取り、旧年に別れを告げて呑み干し、そして少し呑んだ後零時になると、また、新年を迎えながらみんなで乾杯し、杯を呑み干した。それからは四人で明け方まで雑談したりダンスをしたりしてご馳走を食べ、しこたま呑んだ。とても親切なもてなし好きな人たちであった。最後には明け方の肌を刺すような寒さの中をみんなで幹線道路まで歩いて、その親切さに大きな感銘を受けたのであるが、そこでかなり長いことかかってタクシーを拾い、私が乗り込むまで見届けてくれた。

少し話が逸れてしまったが、ナターシャとガーリャは事務所があった棟の一階にあるこぢんまりしたホールの左奥のカウンターで三日に一度の割で働いていた。もう一人、初老の男性が勤務班に加わっていたが、こちらは主に建物の入口に入ってくる外来者をチェックするのが仕事であった。ファックスがまだ普及していない頃で、回線と電源の関係で事務所として利用していた部屋にはテレックスが設置出来なかったため、東京宛の通信は一階ホールのカウンターの奥に置いてあるテレックスを使って、彼女たちに有料で発信のサービスをしてもらっていた。

そんなことで茶飲み仲間に入れてもらえるようになったのであるが、いつも私ばかりでなく、ほかの長期滞在者の何人かにも声がかけてあって、ホールの右奥の彼女らの控えの間にシャンパンやワイン等のお酒を持って一人、二人と集まり、彼女たちが暇になるのを待つことになる。東欧やアゼルバイジャンからの人たちが多かったが、私もロシア語の勉強を兼ねてみんなの話に加わり、彼女たちが出してくれるトマトやキュウリ、サラミ等を肴にして甘口のお酒を酌み交わし、みんなと同じようによく笑ったものである。職住接近であっただけに、普段仕事を終えた後はそのまま住居に戻り、孤独と向き合ったような生活を送っていたのであるが、その一方で、時々オアシスの水を飲むように人々の温かみにほっと一息つける時間を持てたことは幸運と言うべきであつたらう。

誕生日や国際婦人デー等の生活の節目にロシアの人たちがどのように祝うかも彼女たちを通じて知ることが出来(ロシアでは大人にとっても誕生日は大事な生活上の出来事で、それゆえ友達ともなれば、相手の誕生日を忘れずにいて、その日がくると必ず電話でお祝いを述べるのが慣わしである。職場でも誕生日を祝うことが多いようであるが、お祝いをしてもらうというよりもむしろ、誕生日を迎えた人が、一緒に働く人や共通の友達を招いて、普段のお付き合いの感謝を込めてご馳走するのである。招待された人が花束やちょっとしたプレゼントを持ち寄ることは言うまでもない。国際婦人デーは祝日で、男性が愛を込めて女性に贈り物をする)、ロシアの生活の匂いを身近に感じながら、そんなふうにして結構楽しい慰みのひと時を過ごしたのである。

そんな次第で、建物一階の出入口に人が常駐することもなく、従ってそれだけ人と接触する機会の少ないアパートに移り住んだ直後の暫くの間は、その建物自体が持っている何か人の温かみに欠けたような、外界から孤立した雰囲気にその分余計にとまどい、時として何とも捉えようのない遣瀬(やるせ)なさを覚えることがあった。七月は十一時過ぎまで明るく、部屋に戻っても何となく外に遊びに出たいような中途半端な気持になる。夕飯の支度をしながらビールでも呑んでしまった後は、もうこれで車も運転出来ないし、歩いて出かけるにはどこも遠すぎるというわけで、台所の窓から外を眺めながら、まるで家に閉じこめられたような気になってくる。それで、そんな気分打ち勝つために、軽快な音楽

を大音量でかけて気を紛らしたり、音楽に合わせてエアロビクスまがいのことをしたりして、気分転換を図ったものである。絵を沢山かけられるように部屋の壁に一メートル強の間隔で穴をあけ、ネジをはめ込んでもらったのもその頃のことである。

後から振り返ると、ほんの一時のそんな落ち着かない状況が、現代ロシア絵画の蒐集にのめり込むきっかけのひとつになったことが解るのであるが、絵とは全く関係のないこんな個人的な話をあえてここでさせて頂いたのも、この機会にロシア絵画が私個人に及ぼした影響について触れておきたいと考えたからである。

絵画鑑賞は絵とそれを見る個人のコミュニケーションであると常々思うが、絵にかかわる個人の体験も、裏を返せば、その絵が人に与える効果の一面を語っているのである。現代ロシア絵画は、前にも述べた通り、見る時の光量や距離や角度によって微妙に印象が変わり、絵が語りかけてくるように見えるために、何度見てもまた絵を見たいという思いがその都度新たに生まれる。そのためアパートに戻ることが楽しみにさえなり、また、実際部屋でじっくりと絵を眺めていると、絵の世界に惹き込まれて自然と気持が慰められ、心が落ち着く。それが気分転換となって、その後、何かの仕事に取りかかったり、読書や考えごとをしたりすることに苦もなく移行することが出来、現代ロシア絵画を鑑賞することそのものの楽しさとあいまって、絵のそんな副次的な効果にも随分と助けられたと言える。

そんなわけで、孤独の克服をきっかけとして、絵の蒐集熱にもいきおい弾みがつくことになり、毎週休みになると絵を見に出かけることが多くなった。気に入る絵はなかなか見付からなかったが、それでも時間の経過と共に少しずつ絵は増えてきて、それぞれの個性で部屋を引き立てることになった。アパートに戻った時の部屋のがらんとした感じは不思議なくらい和らいだものになり、仕事から帰ると、まず部屋で一休みしながら、ゆっくりと自分の子供の顔でも見るように一通り絵を眺め、それが私には殊の外、大きな慰みになったのである。